

琉球大学学術リポジトリ

キャリア系公開授業の必要性に関する一考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2009-06-03 キーワード (Ja): キャリア開発, 公開授業, 理念論と実践論 キーワード (En): 作成者: 牛窪, 潔, Ushikubo, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10448

キャリア系公開授業の必要性に関する一考察

A Study of the Necessity of an Extension Lecture for Career Development

牛 窪 潔*

キーワード：キャリア開発、公開授業、理念論と実践論

はじめに

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会に加盟している27大学のうち、殆どの大学が公開授業、すなわち正規の授業を一般に公開する取り組みを行っている⁽¹⁾。大学開放を基本方針に掲げ、蓄積された各大学の教育研究成果を地域社会に還元する一環として授業を公開する社会的意義は高い。ただし、各大学のシーズと地域社会のニーズとのマッチングを前提として企画・運営されている公開講座に比べると、公開授業への参加者数は、各大学によって差はあるものの、相対的に低い傾向を示している⁽²⁾。この主たる理由の一つは、公開授業そのものが、本来各大学に所属する学生を対象に提供されている授業であり、地域住民のニーズを直接反映しているものではないことに起因している。ただし、これからの大学は、地域住民さらには社会人のリカレント教育の必要性と重要性を認識し、それらのニーズに合う生涯学習教育を提供していくことの意義は高いと云えよう。

このような背景から、琉球大学観光産業学部産業経営学科と生涯学習教育研究センターは、独立行政法人「中小企業基盤整備機構」の支援と協力の下、平成20年4月より7月にかけて、琉球大学千原キャンパスにて、「トップマネジメントの経営実務講座」を開講した。本公開授業の講師陣としては、沖縄県下のトップマネジメント経験者を招聘し、事業経営に関する実践学をさまざまな課題のもとに講演していただいた。本公開授業の目指すところは、沖縄産業界の健全なる成長と発展に向けて、明日の事業経営を担う人材を対象に、それぞれの受講者のキャリア開発の最初の一步を提供することによって、地域の再生、地域の活性化、地域興しの一助として貢献することにある。

研究目的

上述した背景を踏まえて、琉球大学では、中小企業基盤整備機構の支援および協力と、現在の大学が有するシーズとを融合させ、実践的かつ応用的な授業をテストケース（本調査研究としての）として開講した。本研究の目的は、キャリア系公開授業の実情を実証的に把握することによって、地域住民が求める公開授業の在り方を再確認し、今後の改善に向けた具体的施策のヒントを見いだしていくことにある。なお、本研究が掲げる研究課題は以下のとおりである。

*琉球大学観光産業学部 教授・生涯学習教育研究センター長

研究課題

- 1, テストケースとして公開したキャリア系公開授業に対する受講者の評価について
- 2, 受講者が求めるキャリア系公開授業のテーマについて
- 3, オムニバス方式で提供した各授業に対する受講者の評価と課題について
- 4, 今後のキャリア系公開授業で学んでみたいテーマについて

調査方法

- 1, 毎回の授業時に受講者より回収したアンケートの解析（定量的データと定性的データ、計14回実施）
- 2, 社会人受講者に対する聞き取り調査（仕事の都合で授業への参加が困難になった受講者に対して電話やメールで実施、計10人）
- 3, 最終授業の際に実施したアンケートの解析（定量的データと定性的データ）

調査期間

平成20年4月18日～平成20年7月25日

調査対象者

沖縄県中小企業整備機構の支援と協力のもとに、琉球大学観光産業科学部産業経営学科と琉球大学生涯学習教育研究センターとが実施主体となり、平成20年度4月から7月にかけて開講した「トップマネジメントの経営実務講座：マーケティング特殊講義」を受講した大学生と公開授業受講者を本研究の調査対象とする。受講者の内訳は以下のとおりである。

「研究課題1と2」	「研究課題3」
大学生 75人	大学生 111人
社会人 27人	社会人 75人
合計 102人	合計 186人
【社会人の内訳】	【社会人の内訳は未調査】
経営者：4人、管理者：8人、従業員：8人	
その他：7人 「女性：男性=53人：49人」	

なお、各研究課題の分析は、以下のようなサンプリングにより実施した。

- ①全サンプルを対象とする分析
- ②社会人と学生との比較を対象とする分析
- ③女性と男性との比較を対象とする分析

第1章 トップマネジメントの経営実務講座に対する受講者の評価について

結果1、本公開授業を受講する前の期待度と受講した後の満足度に関する比較分析

【① 全サンプルを対象とする結果】

本調査項目は5点反応尺度でおこない、期待度については次のような尺度で質問した。

(1：期待していた、2：やや期待していた、3：どちらともいえない、4：あまり期待していなかった、5：期待していなかった)。さらに満足度については次のような尺度で質問した。(1：満足した、2：やや満足した、3：どちらともいえない、4：あまり満足できなかった、5：満足できなかった)

[グループ（全数）統計量：期待度と満足度の平均値と標準偏差]

分析対象	n	平均値	標準偏差	標準誤差
期待度	102	1.43	.725	.072
満足度	102	1.41	.635	.063

[T検定結果：期待度と満足度の平均値の差の検定]

	等分散のためのLeveneの検定		2つの母平均の差の検定（独立サンプル）			
	F値	有意確率	t値	自由度	有意確率	平均値の差
等分散を採択	.884	.348	.206	202	.834	.021
等分散を棄却			.206	198.572	.834	.021

本公開授業の地域住民に向けた広報活動は、新聞、チラシ、口コミ等の方法を用い、情報提供を事前に行っていた為、本公開授業へ寄せる高い期待の声をよく耳にした。このような状況を反映すべく、上記図表は、本公開授業を受講する前の期待度と受講後の満足度の比較分析結果である。

調査結果によれば、期待度「1.43」・満足度「1.41」とも高い値を示しており、平均値の差は僅か「0.02」で若干満足度の方が高くなっている。確認のため、帰無仮説：「受講前の期待度＝受講後の満足度」に対して、平均値の差の検定を行った。t検定の解析結果は、自由度202、t値0.206（等分散を仮定）にて、有意確率は0.834となっている。有意水準を $\alpha=0.05$ とすると、有意確率 $0.834 > 0.05$ となり仮説は採択される。

したがって、それぞれ高い数値を示している期待度と満足度との間には有意差はみられず、本公開授業の成果は高い評価を得られたと判断できる。具体的にどのような授業内容に期待を寄せているかについては、次章の分析に委ねることとする。

結果2、社会人と大学生とを比較対象とした、受講前の期待度と受講後の満足度に関する比較分析

【②社会人と学生との比較を対象とする結果】

[グループ統計量(社会人と大学生)：期待度と満足度の平均値と標準偏差]

分析対象	n	平均値	標準偏差	標準誤差
社会人・期待度	27	1.33	.620	.119
大学生・期待度	75	1.47	.759	.089
社会人・満足度	27	1.30	.542	.104
大学生・満足度	75	1.45	.664	.077

[T検定結果：期待度と満足度の平均値の差の検定]

	等分散のためのLeveneの検定		2つの母平均の差の検定（独立サンプル）			
	F値	有意確率	t値	自由度	有意確率	平均値の差
等分散を採択	1.467	.229	-.819	100	.415	-.133
等分散を棄却			-.900	55.914	.372	-.133
等分散を採択	2.304	.132	-1.103	100	.273	-.157
等分散を棄却			-1.214	55.914	.230	-.157

前頁図表はサンプル総数102人に対して、社会人（27人）と大学生（75人）とに区分し、社会人と大学生との間に期待度および満足度に差があるかどうかを検証した分析結果である。

調査結果は、社会人が抱いた期待度（平均値）「1.33」と大学生が抱いた期待度（平均値）「1.47」との間（ $0.14=1.47-1.33$ ）に有意差があるかどうかをt検定によって解析したものである。帰無仮説：「社会人の期待度＝大学生の期待度」に対して平均値の差の検定を行った。t検定の解析結果は、自由度100、t値 -0.819 （等分散を仮定）にて、有意確率は 0.415 となっている。有意水準を $\alpha=0.05$ とすると、有意確率 $0.415>0.05$ となり仮説は採択される。満足度についても上図表に示したごとく、双方の間に有意差はみられない。

したがって、社会人、大学生とも、それぞれ高い数値を示している期待度および満足度の間には有意差はみられず、本公開授業に対する期待と満足は高いと判断できる。

結果 3、女性と男性とを比較対象とした、受講前の期待度と受講後の満足度に関する比較分析

【③女性と男性との比較を対象とする結果】

[グループ統計量(女性と男性)：期待度と満足度の平均値と標準偏差]

分析対象	n	平均値	標準偏差	標準誤差
女性・期待度	53	1.42	.692	.095
男性・期待度	49	1.45	.765	.109
女性・満足度	53	1.32	.547	.075
男性・満足度	49	1.51	.711	.102

[T検定結果：期待度と満足度の平均値の差の検定]

等分散のためのLeveneの検定			2つの母平均の差の検定（独立サンプル）			
	F値	有意確率	t値	自由度	有意確率	平均値の差
等分散を採択	.233	.630	-.235	100	.815	-.034
等分散を棄却			-.234	96.863	.816	-.034
等分散を採択	3.239	.075	-1.515	100	.133	-.189
等分散を棄却			-1.500	90.025	.137	-.189

上記図表は、サンプル総数102人に対して、女性（53人）と男性（49人）とに区分し、女性と男性との間に、期待度および満足度に差があるかどうかを検証した比較分析結果である。

調査結果は、女性が抱いた期待度（平均値）「1.42」と男性が抱いた期待度（平均値）「1.45」との間（ $0.03=1.45-1.42$ ）に有意差があるかどうかをt検定によって解析したものである。帰無仮説：「女性の期待度＝男性の期待度」に対して平均値の差の検定を行った。t検定の解析結果は、自由度100、t値 -0.235 （等分散を仮定）にて、有意確率は 0.815 となっている。有意水準を $\alpha=0.05$ とすると、有意確率 $0.815>0.05$ となり仮説は採択される。満足度については有意確率は 0.133 と棄却域にかなり接近してはいるが、検定結果としては、双方の間に有意差はみられない。

したがって、女性、男性とも、それぞれ高い数値を示している期待度および満足度の間には有意差はみられず、本公開授業に対する期待と満足は高いと判断できる。

結果4、大学生と社会人が共に学ぶことができる講義の必要性について

【① 全サンプルを対象とする結果】

[度数テーブル：大学生と社会人が共に学ぶことができる講義の必要性]

	度数	Percent	有効Percent	累積Percent
有効 必要だと思う	83	40.3	82.2	82.2
やや必要だと思う	12	5.8	11.9	94.1
どちらともいえない	5	2.4	5.0	99.0
あまり必要だと思わない	1	.5	1.0	100.0
必要だと思わない	0	0.0	0.0	
合計	101	49.0	100.0	
欠損値 (システム欠損値)	105	51.0		
合計	206	100.0		

上記図表は、大学生と社会人が共に学ぶことができる講義の必要性について尋ね、その結果を度数テーブルとして整理したものである。調査結果によれば、「必要だと思う：82.2%」と「やや必要だと思う：11.9%」とを合わせると累積割合は94.1%と非常に高い値を示しており、この課題の重要性が伺える。社会人にとっては、琉球大学という学舎に週に一度赴いて、若い学生と一緒に学ぶことができるもう1人の自分の発見に、ある種の新鮮さと良い意味での緊張感を抱くことができると指摘する受講生が多かった。大学生にとっては、約70名の社会人が真剣に授業に取り組む姿に圧倒され、かつ社会人受講者が的を得た実践的な質問を講師に投げかける言動に刺激を得られるという指摘が多かった。このような評価は、夜間主コースのクラスの特徴にも見られるが、社会人学生が減少している現在の夜間主コースにおいては、このようなメリットが必ずしも実現できておらず、社会人入学生の確保という入り口管理の充実施策を展開すると同時に、公開授業としての門戸を社会人により開いていくことが重要であると云えよう。

結果5、講師と受講生とが意見交換できる参加型の授業の必要性について

【① 全サンプルを対象とする結果】

[度数テーブル：講師と受講生とが意見交換できる参加型の授業の必要性]

	度数	Percent	有効Percent	累積Percent
有効 必要だと思う	78	37.9	77.2	77.2
やや必要だと思う	19	9.2	18.8	96.0
どちらともいえない	3	1.5	3.0	99.0
あまり必要だと思わない	1	.5	1.0	100.0
必要だと思わない	0	0.0	0.0	
合計	101	49.0	100.0	
欠損値 (システム欠損値)	105	51.0		
合計	206	100.0		

上記図表は、講師と受講生とが意見交換できる参加型授業の必要性について尋ね、その結果を度数テーブルとして整理したものである。調査結果によれば、「必要だと思う：77.2%」と「やや必要だと思う：18.8%」とを合わせると累積割合は96.0%という非常に高い値を示しており、この課題について

の必要性が伺える。特に社会人受講生の中に、参加型授業の必要性を強調する割合が高い。具体的には、クラスの規模を小さくして、テーマ性に富んだディスカッション形式の授業を取り入れて欲しいという要望が多かった。ただし、今回のような大人数の受講者で、ベンチャー・イノベーション系の企業概要や経営者の本音を紹介する授業内容・授業形態であると、参加型授業の導入は難しいという指摘も多かった。いずれにせよ、多様なニーズ（座学方式、議論方式、ケース・スタディ方式、等）に適う複数の授業提供を今後考案・提供してといくことが求められている。

結果6、社会人と大学生とを比較対象とした、共学（社会人と大学生）の必要性と参加型授業の必要性に関する比較分析

【②社会人と学生との比較を対象とする結果】

[グループ統計量（社会人と大学生）：共学と参加型授業の必要性に関する平均値と標準偏差]

分析対象	n	平均値	標準偏差	標準誤差
社会人・共学の必要性	27	1.22	.641	.123
大学生・共学の必要性	75	1.26	.575	.067
社会人・参加型授業の必要性	27	1.22	.424	.082
大学生・参加型授業の必要性	75	1.30	.613	.071

[T検定結果：期待度と満足度の平均値の差の検定]

等分散のためのLeveneの検定			2つの母平均の差の検定（独立サンプル）			
	F値	有意確率	t値	自由度	有意確率	平均値の差
等分散を採択	.154	.695	-.259	99	.796	-.035
等分散を棄却			-.246	42.228	.807	-.035
等分散を採択	1.847	.177	-.586	99	.559	-.075
等分散を棄却			-.693	67.010	.491	-.075

上記図表は、社会人と大学生との間に共学の必要性および参加型授業の必要性に意識の差があるかどうかを検証した分析結果である。検証結果は、いずれも帰無仮説は採択されており、両者の間に有意差はみられない。特筆すべきは、社会人の回答が「共学の必要性：1.22」、「参加型授業の必要性：1.22」、双方共「1.22」という高い数値を示しており、これらの課題を実現して欲しいというニーズの高さが伺える。

結果7、女性と男性とを比較対象とした、共学（社会人と大学生）の必要性と参加型授業の必要性に関する比較分析

【③女性と男性との比較を対象とする結果】

[グループ統計量（女性と男性）：共学と参加型授業の必要性に関する平均値と標準偏差]

分析対象	n	平均値	標準偏差	標準誤差
女性・共学の必要性	52	1.23	.546	.076
男性・共学の必要性	49	1.27	.638	.091
女性・参加型授業の必要性	52	1.29	.605	.084
男性・参加型授業の必要性	49	1.27	.531	.076

[T検定結果：期待度と満足度の平均値の差の検定]

等分散のためのLeveneの検定			2つの母平均の差の検定（独立サンプル）			
	F値	有意確率	t値	自由度	有意確率	平均値の差
等分散を採択	.368	.546	-.293	99	.770	-.035
等分散を棄却			-.291	94.696	.771	-.035
等分散を採択	.190	.664	-.204	99	.839	-.023
等分散を棄却			-.205	98.522	.838	-.023

上記図表は女性と男性との間に共学の必要性および参加型授業の必要性に意識の差があるかどうかを検証した分析結果である。検証結果は、いずれも帰無仮説は採択されており、両者の間に有意差はみられない。

結果8、キャリア系公開授業の希望開講時間帯について

[度数テーブル（全 数）：キャリア系公開授業の希望開講時間帯]

	度数	Percent	有効Percent	累積Percent
有効 6時限目（18:00～19:30）	51	24.8	53.7	53.7
7時限目（19:40～21:10）	19	9.2	20.0	73.7
どちらでも構わない	25	12.1	26.3	100.0
合計	95	46.1	100.0	
欠損値（システム欠損値）	111	53.9		
合計	206	100.0		

[度数テーブル（社会人）：キャリア系公開授業の希望開講時間帯]

	度数	Percent	有効Percent	累積Percent
有効 6時限目（18:00～19:30）	9	33.3	37.5	37.5
7時限目（19:40～21:10）	9	33.3	37.5	75.0
どちらでも構わない	6	22.2	25.0	100.0
合計	24	88.9	100.0	
欠損値（システム欠損値）	3	11.1		
合計	27	100.0		

[度数テーブル（大学生）：キャリア系公開授業の希望開講時間帯]

	度数	Percent	有効Percent	累積Percent
有効 6時限目（18:00～19:30）	42	56.0	59.2	59.2
7時限目（19:40～21:10）	10	13.3	14.1	73.2
どちらでも構わない	19	25.3	26.8	100.0
合計	71	94.7	100.0	
欠損値（システム欠損値）	4	5.3		
合計	75	100.0		

前頁図表は、キャリア系公開授業の希望開講時間帯について尋ね、その結果を度数テーブルとして整理したものである。調査結果によれば、社会人は「7時限目19:40～21:10」の時間帯を望んでいる割合が、大学生に比べて高い。特に若い社会人受講生にとっては、午後6時からスタートする本講義に、時間に遅れずに通学するためには、遅くとも午後5時に業務を終了させなければならず、千原キャンパスへのアクセス上の問題点を指摘している。特筆すべきは、登録時には73名の社会人が本講座を登録したが、受講率は徐々に低下していき、7月の終了時には27名にまで減少していた。約50名の受講者が継続的受講を断念せざるを得なかった理由が、授業開始時間の問題である。本データは最終授業時に出席されていた社会人受講者によるものであり、社会人の母集団を推定するサンプリングにはなっていない。

なお、女性と男性の比較分析結果は、社会人と大学生との分析結果と同じ傾向を示しているため、結果報告は割愛することにする。

結果9、キャリア系公開授業の希望開講曜日について

【① 全サンプルを対象とする結果】

[度数テーブル(全数)：キャリア系公開授業の希望開講曜日]

	全体(度数・%)		社会人(度数・%)		大学生(度数・%)		女性(度数・%)		男性(度数・%)	
月曜	16	11.0%	3	8.8%	13	11.7%	6	7.6%	10	15.2%
火曜	10	6.9%	2	5.9%	8	7.2%	6	7.6%	4	6.1%
水曜	8	5.5%	3	8.8%	5	4.5%	5	6.3%	3	4.5%
木曜	23	15.9%	5	14.7%	18	16.2%	15	19.0%	8	12.1%
金曜	70	48.3%	12	35.3%	58	52.3%	39	49.4%	31	47.0%
土曜	18	12.4%	9	26.5%	9	8.1%	8	10.1%	10	15.2%
合計	145	100.0%	34	100.0%	111	100.0%	79	100.0%	66	100.0%

【②社会人と学生との比較を対象とする結果】

[希望開講曜日に関する社会人と大学生とのクロス表]

	大 学 生	社 会 人	合 計
金曜日 度数(期待値)	58 (53.6)	12 (16.4)	70 (70.0)
月～木曜日 度数(期待値)	44 (43.6)	13 (13.4)	57 (57.0)
土曜日 度数(期待値)	9 (13.8)	9 (4.2)	18 (18.0)
合 計 度数(期待値)	111 (111.0)	34 (34.0)	145 (145.0)

[カイ二乗検定結果：希望開講曜日に関する社会人と大学生との有意差検定]

	値	自 由 度	漸近有意確率(両側)
Pearsonのカイ二乗検定結果	8.333 ^a	2	.013* 「有意」
尤度比	7.641	2	.022
有効なケースの数	145		

上記図表は、キャリア系公開授業の希望開講曜日について尋ね、その結果を度数テーブルとして整理したものである。調査結果によれば、いずれの分析対象も、金曜日もしくは土曜日の開講を望む割合が高い。土曜日については、現行の琉球大学の科目提供状況から判断した場合、土曜日の提供科目

は皆無のため、土曜日開講のニーズに即時対応することは困難である。ただし、今後の改善施策策定の際の貴重なデータとして活用することを目的とし、社会人が週末の開講を強く望んでいるかどうかを、クロス表を作成しカイ二乗検定で検証を試みた。帰無仮説：「社会人＝大学生：希望する開講曜日に大学生と社会人の意向に相違はない」に対して母比率の差の検定を行った。カイ二乗検定の解析結果は、自由度2、ピアソンのカイ二乗値 8.333にて、有意確率は0.013となっている。有意水準を $\alpha=0.05$ とすると、有意確率 $0.013<0.05$ となり仮説は棄却される。すなわち社会人と大学生の希望開講曜日に対する意向は同じという仮説は捨てられ、社会人の方が週末の開講を強く望んでいるという意向は、統計的な根拠によって裏付けられたことになる。したがって、社会人には金曜日の「7時限目19:40～21:10」の時間帯に開講することが得策であると判断する。

第2章 受講者が求めるキャリア系公開授業のテーマについて

本章では、受講者が求めるキャリア系公開授業のテーマについて、分析と考察を試みた。

下記一覧表は、本公開授業が開催される準備段階の際に、琉球大学観光産業科学部産業経営学科と琉球大学生涯学習教育研究センターとが実施主体として、キャリア系公開授業に相応しい具体的なテーマを吟味・選定したものである。本章では、下記15のテーマを仮説として取り上げ、受講者に対するアンケート結果および聞き取り調査結果によって、本仮説の検証を試みながら、受講者が求める授業テーマについて分析と考察を行った。

「トップマネジメントの実務講座：主要テーマ案」

1. 経営者としての考え方、実践行動哲学、倫理観、経営スキルの紹介
2. 企業成長と成果に繋がる経営戦略の核心
3. 経営者としての職業観とこれまでに歩まれてこられたキャリア・パス
4. これからの企業が求める人材像（理念、意欲、スキル）
5. 失敗から学ぶ事業経営の本質
6. マーケティングと会計学の接点
7. 事業経営に関する沖縄の強みと弱み
8. 大学で学ぶ学問と企業で培う実践論との接点
9. 沖縄が健全なる成長を遂げていく上で必要となる新規事業の役割と意義
10. 沖縄に求められるイノベーションの必要性和重要性
11. 若者が、古き良き企業文化、伝統、強みと魅力を活かすための術
12. もし私が20歳に戻れたとしたら、いったい何に情熱を傾けたいか
13. 自身の弱みを克服し強みを活かしていく術
14. デジタルとアナログの調和について
15. CS（顧客満足）とES（従業員満足）とPS（地域社会の満足）との三位一体について

本公開授業最終日に行ったアンケート調査にて、特に興味と関心のある講義テーマ案を各自5つ選んでもらい、さらに自由記入欄に、次回からの公開授業で学んでみたいテーマを記載していただいた。

以下に15項目のテーマ案に関する受講者の評価を、多重回答統計量によって割り出し、その概要を把握すると共に、とりわけ特徴のある因子（テーマ）を選定し、クロス表を作成することによってカイ二乗分析をおこない、テーマのニーズに関する方向性を明らかにする。

最後に、受講者の定性的意見と評価を整理することによって本章としての結論を導き出すことにする。

結果10、興味と関心の高い公開授業のテーマについて

【① 全サンプルを対象とする結果】

「多重回答統計量（全体）：興味と関心の高い授業テーマ：各順位」

全 体 の 順 位	社会人の順位	大学生の順位	女性の順位	男性の順位
1 経営者としてのミッション	1	1	4	1
2 企業が求める人材像	9	2	3	2
3 学問と実践との接点	7	3	1	7
4 失敗から学ぶ経営の本質	2	5	5	3
5 弱みの克服と強みの活用	7	4	1	9
6 経営者としての職業観	4	7	6	4
7 沖縄企業の強みと弱み	11	5	9	4
8 CS・PS・ESの三位一体化	2	10	6	9
9 企業成長の戦略核心	13	8	14	4
10 新規事業の役割と意義	4	12	10	8
11 もしも二十歳になれたら	13	9	6	13
12 マーケティングと会計との接点	6	13	12	9
13 革新の必要性和重要性	9	11	11	12
14 古き良き伝統を活かす術	11	14	12	14
15 デジタルとアナログの調和	15	15	15	15

上記図表は、102名の受講者に対して、興味と関心の高い公開授業のテーマについて尋ね（5つ選択）、その結果順位を記したものである。一番左側が「1位の経営者としてのミッション」から「15位のデジタルとアナログの調和」までの順位と講義名が記されている。さらに、各15のテーマに対して、社会人としての、大学生としての、女性としての、男性としての順位が、それぞれ記されている。それぞれの層別変数順位には、共通点と相違点が存在するが、本研究では、全体の順位上位7位までのテーマを分析対象として取り上げ、層別変数ごとにクロス表を作成し、それぞれの傾向を分析・考察した。

【②社会人と学生との比較を対象とする結果】

「興味と関心の高い講義テーマTop7に関する社会人と大学生とのクロス表」

興味と関心の高い講義テーマ Top 7	学 生 度数（期待値）	社会人 度数（期待値）	合 計 度数（期待値）
1 経営者としてのミッション	24 (26.5)	11 (8.5)	35 (35.0)
2 企業が求める人材像	27 (24.3)	5 (7.7)	32 (32.0)
3 学問と実践との接点	33 (31.1)	8 (9.9)	41 (41.0)
4 失敗から学ぶ経営の本質	42 (47.0)	20 (15.0)	62 (62.0)
5 弱みの克服と強みの活用	27 (29.6)	12 (9.4)	39 (39.0)
6 経営者としての職業観	29 (28.8)	9 (9.2)	38 (38.0)
7 沖縄企業の強みと弱み	41 (35.6)	6 (11.4)	47 (47.0)
合 計	223 (223.0)	71 (71.0)	294 (294.0)

「カイ二乗検定結果：興味と関心の高い講義テーマTop 7：社会人と大学生」

	値	自 由 度	漸近有意確立(両側)
Pearsonのカイ二乗検定結果	9.251 ^a	6	.160
尤度比	9.643	6	.141
有効なケースの数	294		

上記図表は、全体集計にて選定された「興味と関心の高い講義テーマ・トップ7」に対して、社会人と大学生が同じニーズを抱くか否かを検証するために作成したクロス表とカイ二乗検定結果である。帰無仮説：「社会人＝大学生：興味と関心の高い講義テーマ・トップ7に対して大学生と社会人の意向に相違はない」に対して母比率の差の検定を行った。カイ二乗検定の解析結果は、自由度6、ピアソンのカイ二乗値 9.251にて、有意確率は0.106となっている。有意水準を $\alpha=0.05$ とすると、有意確率 $0.106 > 0.05$ となり仮説は採択される。すなわち社会人と大学生が抱く興味と関心の高いテーマに対する意向は同じという仮説どおりの結果となった。ただし、有意確率が0.106という10%棄却域に入るか否かという微妙な位置付けになっていることから、更なる分析の必要性が伺える。これについては、次の女性と男性とのクロス分析を行った後に、再度新たな分析を行うことにする。

【③女性と男性との比較を対象とする結果】

「興味と関心の高い講義テーマTop 7に関する女性と男性とのクロス表」

興味と関心の高い講義テーマ Top 7	女 性 度数 (期待値)	男 性 度数 (期待値)	合 計 度数 (期待値)
1 経営者としてのミッション	18 (18.6)	17 (16.4)	35 (35.0)
2 企業が求める人材像	15 (17.0)	17 (15.0)	32 (32.0)
3 学問と実践との接点	27 (21.8)	14 (19.2)	41 (41.0)
4 失敗から学ぶ経営の本質	23 (32.9)	39 (29.1)	62 (62.0)
5 弱みの克服と強みの活用	21 (20.7)	18 (18.3)	39 (39.0)
6 経営者としての職業観	27 (20.2)	11 (17.8)	38 (38.0)
7 沖縄企業の強みと弱み	25 (24.9)	22 (22.1)	47 (47.0)
合 計	156 (156.0)	138 (138.0)	294 (294.0)

「カイ二乗検定結果：興味と関心の高い講義テーマTop 7：女性と男性」

	値	自 由 度	漸近有意確立(両側)
Pearsonのカイ二乗検定結果	14.516 ^a	6	.024* 「有意」
尤度比	14.795	6	.022
有効なケースの数	294	294	

上記図表は、全体集計にて選定された「興味と関心の高い講義テーマ・トップ7」に対して、女性と男性が同じニーズを抱くか否かを検証するために作成したクロス表とカイ二乗検定結果である。帰無仮説：「女性＝男性：興味と関心の高い講義テーマのトップ7に対して女性と男性の意向に相違はない」に対して母比率の差の検定を行った。カイ二乗検定の解析結果は、自由度6、ピアソンのカイ二乗値 14.516にて、有意確率は0.024となっている。有意水準を $\alpha=0.05$ とすると、有意確率 $0.024 < 0.05$ となり仮説は棄却される。すなわち女性と男性が抱く興味と関心の高いテーマに対する意向は、必ずしも同じとは言えないという結果となった。

ここで、更なる分析の仮説として、興味と関心の高い講義テーマトップ7の共通因子として、「理念型テーマ」と「実践型テーマ」として再分類し、「社会人と大学生」そして「女性と男性」の間に有意差および特徴があるか否かを検証してみることにする。

なお、「理念型テーマ」を構成する因子は「経営者としてのミッション」と「経営者としての職業観」とする。

「実践型テーマ」を構成する因子は、「弱みの克服と強みの活用」と「沖縄企業の強みと弱み」と「企業が求める人材像」とする。

【②社会人と学生との比較を対象とする結果】

[理念論と実践論に関する社会人と大学生とのクロス表]

	大 学 生	社 会 人	合 計
実践論 度数 (期待値)	97 (89.1)	20 (27.9)	117 (117.0)
理念論 度数 (期待値)	66 (73.9)	31 (23.1)	97 (97.0)
合 計 度数 (期待値)	163 (163.0)	51 (51.0)	214 (214.0)

[カイ二乗検定結果：理念論と実践論に関する社会人と大学生との有意差検定]

	値	自 由 度	漸近有意確率(両側)
Pearsonのカイ二乗検定結果	6.455 ^B	1	.011* 「有意」
尤度比	6.451	1	.011
有効なケースの数	214		

上記図表は、「興味と関心の高い講義テーマのトップ7」の中から2つの因子（理念型テーマと実践型テーマ）を抽出し、社会人と大学生が同じニーズを抱くか否かを検証するために作成したクロス表とカイ二乗検定結果である。帰無仮説：「社会人＝大学生：社会人と大学生の意向に相違はない」に対して母比率の差の検定を行った。カイ二乗検定の解析結果は、自由度1、ピアソンのカイ二乗値6.455にて、有意確率は0.011となっている。有意水準を $\alpha=0.05$ とすると、有意確率 $0.011 < 0.05$ となり仮説は棄却される。すなわち「理念型テーマ」と「実践型テーマ」に対する意向は同じとは言えないという仮説を覆す結果となった。

具体的には、社会人は大学生に比べて理念型のテーマを求める傾向が強い。これに対して大学生は社会人に比べて実践的なテーマを求める傾向が強い。

下記図表にも同じような結果が記されている。すなわち男性は「理念型テーマ」を求める傾向が強く、女性は「実践型テーマ」を求める傾向が強くなっている。

【③女性と男性との比較を対象とする結果】

[理念論と実践論に関する女性と男性とのクロス表]

	女 性	男 性	合 計
実践論 度数 (期待値)	67 (59.0)	50 (58.0)	117 (117.0)
理念論 度数 (期待値)	41 (49.0)	56 (48.0)	97 (97.0)
合 計 度数 (期待値)	108 (108.0)	106 (106.0)	214 (214.0)

[カイ二乗検定結果：理念論と実践論に関する女性と男性との有意差検定]

	値	自由度	漸近有意確率（両側）
Pearsonのカイ二乗検定結果	4.771 ^B	1	.029* 「有意」
尤度比	4.789	1	.029
有効なケースの数	214		

今回の仮説棄却を裏付ける根拠であるが、聞き取り調査によれば、大学生及びさらなるキャリアアップを目指す女性にとっては、いわゆる即戦力としての資質と能力を育成したいというニーズが高く、理念論に対する重要性は認識しているものの、本音としてはより実践的かつ応用的な知識、情報、さらには資格取得を求めている声が多かった。

反対に社会人男性については、専門的知識や情報を習得するための方法論のみに傾注したのではなく、社会人として基本思想、ビジョン、使命感、判断基準といった真の価値基準との融合を求めている受講生、特に経営者や管理者については、この傾向が強い。

いずれにせよ、これからの沖縄経済社会が求める質の高い経営者および管理者の育成に相応しい課題を厳選し、理念論および実践論としての授業内容の充実を図ると同時に、双方の融合を実現しうる授業内容の企画・開発が求められていると言えよう。さらに、具体的テーマを受講生に提供し、授業内容並びに自身の学習を通じて、各テーマに対する答えを創り上げ、その成果を蓄積できるような講義内容の改善と工夫が求められていると判断する。

第3章 オムニバス方式で提供した各授業に対する受講者の評価と課題について

本公開授業では、計14回の各授業終了時に、受講者に対して出席状況およびアンケート調査票を配布・記入させた。アンケート内容は、その日の授業の満足度と理解度を5点反応尺度にて記入させ、さらに授業の感想と質問さらには要望事項等を自由記入方式で記入させた。

本調査項目は5点反応尺度でおこない、理解度については次のような尺度で質問した。

(5：理解できた、4：やや理解できた、3：どちらともいえない、2：あまり理解できなかった、1：理解できなかった)。さらに満足度については次のような尺度で質問した。(5：満足した、4：やや満足した、3：どちらともいえない、2：あまり満足できなかった、1：満足できなかった)

本章では、上記データの分析に基づき、オムニバス方式で提供した各授業に対する受講者の満足度と理解度に関する実情を一元配置の分散分析で検証し、各授業と担当講師に対する評価を定量的見地から行うことにする。さらに、受講生に対しては、社会人と大学生との比較に見る満足度と理解度の相違を定量的な見地から分析し、その結果に基づき本公開授業の今後の課題と方向性について、聞き取り調査および自由記入欄の意見を参考に定性的提言を試みることにする。

結果11、それぞれの授業（14回）に対する受講生の満足度と理解度について

「分散分析結果：14回それぞれの授業に対する受講生の満足度」

講義の順番	講師仮名	回答の度数	満足度の 平均値	満足度の 順位	標準偏差	平均値の95%信頼区間	
						下限	上限
1	A	131	4.62	6	.685	4.50	4.74
2	B	142	4.73	2	.490	4.65	4.81
3	C	124	4.40	11	.863	4.24	4.55
4	D	113	3.63	14	1.002	3.44	3.82

5	E	51	4.47	9	.644	4.29	4.65
6	F	109	4.64	5	.674	4.51	4.77
7	G	106	4.33	12	.836	4.17	4.49
8	H	117	4.60	7	.603	4.49	4.71
9	I	105	3.90	13	.986	3.71	4.10
10	J	105	4.70	4	.521	4.59	4.80
11	K	101	4.50	8	.716	4.35	4.64
12	L	90	4.71	3	.525	4.60	4.82
13	M	93	4.76	1	.519	4.66	4.87
14	N	88	4.47	9	.677	4.32	4.61
合計	14人	1475	4.46		.784	4.42	4.50

[分散分析結果：14回それぞれの授業に対する受講生の満足度]

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	152.695	13	11.746	22.765	.000* 「有意」
グループ内	753.813	1461	.516		
合計	906.508	1474			

上記図表は、14回それぞれの授業に対する評価指標として「授業に対する満足度」を取り上げ、それぞれの平均値の差に関する分析を、一元配置の分散分析によって解析した結果である。なお、上記図表の左側から、4月から7月にかけて行った講義の順番、各講義を担当した講師の仮名（A氏～N氏）、回答の度数、満足度の平均値、満足度の順位、満足度の標準偏差、最後に各平均値に対する区間推定値の下限值と上限値が記されている。

下の図表は分散分析結果であるが、「帰無仮説：それぞれの講義の満足度は等しい」に対して、各平均値の差の検定を行った。分散分析の解析結果は、自由度13、検定統計量のF値が22.765、そのときの有意確率が0.000となっている。有意水準を $\alpha=0.05$ とすると、有意確率 $0.000 < 0.05$ により、仮説は棄却される。したがって、提供された14回の授業間には、満足度に関する有意差が存在することが明らかになった。

[分散分析結果（その後の検定）：Bonferroniの方法による多重比較]

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
A				*					*					
B			*	*			*	*						
C		*		*				*					*	
D	*	*	*		*	*	*	*		*	*	*	*	*
E				*					*					
F				*					*					
G		*		*					*	*		*	*	
H				*					*					
I	*	*	*		*	*	*	*		*	*	*	*	*

J			*		*	*							
K			*			*							
L			*		*	*							
M		*	*		*	*							
N			*			*							

*が付記されているセルの組合せの平均値の差は0.05で有意

さらに、それぞれ14のグループ間（講義間）の差を解析するために、Bonferroniの方法による多重比較を行った。上記図表がその解析結果を整理したものである。*が付記されているセルの組合せは、それぞれの平均値の差が0.05の確率で有意と判定された組合せである。例えば、A氏の講義に対する満足度（4.62）は、D氏の満足度（3.63）とI氏の満足度（3.90）との間に有意差があり、統計上の解釈では明らかに満足度の点で差が存在するといえる。

「分散分析結果：14回それぞれの授業に対する受講生の理解度」

講義の順番	講師仮名	回答の度数	満足度の 平均値	満足度の 順位	標準偏差	平均値の95%信頼区間	
						下限	上限
1	A	129	4.67	4	.577	4.57	4.77
2	B	137	4.72	3	.449	4.65	4.80
3	C	123	4.46	8	.668	4.34	4.57
4	D	114	3.41	14	1.112	3.21	3.62
5	E	51	4.18	12	.767	3.96	4.39
6	F	108	4.73	2	.466	4.64	4.82
7	G	106	4.44	10	.718	4.31	4.58
8	H	117	4.63	5	.551	4.53	4.73
9	I	105	4.06	13	.864	3.89	4.22
10	J	106	4.61	7	.545	4.51	4.72
11	K	101	4.39	11	.734	4.24	4.53
12	L	90	4.62	6	.572	4.50	4.74
13	M	92	4.77	1	.447	4.68	4.86
14	N	87	4.45	9	.678	4.30	4.59
合計	14人	1466	4.45		.758	4.41	4.49

「分散分析結果：14回それぞれの授業に対する受講生の理解度」

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	186.911	13	14.378	31.831	.000*「有意」
グループ内	655.854	1452	.452		
合計	842.765	1465			

上記図表は、14回それぞれの授業に対する受講生の評価指標として「授業に対する理解度」を取り上げ、それぞれの平均値の差に関する分析を一元配置の分散分析によって行った解析結果である。

その下の図表は分散分析結果であるが、「帰無仮説：それぞれの講義に対する理解度は等しい」に対して、各平均値の差の検定を行った。分散分析の解析結果は、自由度13、検定統計量のF値が31.831、そのときの有意確率が0.000となっている。有意水準を $\alpha=0.05$ とすると、有意確率 $0.000 < 0.05$ により、仮説は棄却される。したがって、提供された14回の授業間には、学生の理解度に関する有意差が存在することが明らかになった。

[分散分析結果（その後の検定）：Bonferroniの方法による多重比較]

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
A				*	*				*					
B				*	*				*		*			
C				*					*					
D	*	*	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
E	*	*		*		*		*		*		*	*	
F				*	*				*	*				
G				*					*					
H				*	*				*					
I	*	*	*	*		*	*	*		*	*	*	*	*
J				*	*				*					
K		*		*		*			*				*	
L				*	*				*					
M				*	*				*		*			
N				*					*					

*が付記されているセルの組合せの平均値の差は0.05で有意

さらに、それぞれ14のグループ間（講義間）の差を解析するために、Bonferroniの方法による多重比較を行った。上記図表がその解析結果を整理したものである。*が付記されているセルの組合せは、それぞれの平均値の差が0.05の確率で有意と判定された組合せである。図表の見方は、満足度の見方と同様である。

最後に、公開授業の受講生に焦点をあて、特に、社会人と大学生との比較に見る満足度と理解度の相違を定量的な見地から分析し、その結果に基づき本公開授業の今後の課題と方向性について提言を試みることにする。

次頁の図表は、社会人と大学生との比較にみる満足度および理解度の平均値の差の検定を行い、その結果を一覧表に整理したものである。

左側に整理されている「満足度」の特徴については、社会人と大学生の間に見られる有意差は、J氏の講義のみで、その他の13講義に有意差はみられない。多少のばらつきはあるものの、合計値が象徴しているように、満足度に関する平均値の差は見受けられない。

「分散分析結果：14回それぞれの授業に対する受講生の満足度」

講義の 順 番	講師仮名	満足度 大学生	満足度 社会人	有意確率	理解度 大学生	理解度 社会人	有意確率
1	A	4.66	4.53	.303	4.63	4.76	.183
2	B	4.69	4.81	.194	4.65	4.88	.001* 「有意」
3	C	4.35	4.52	.353	4.43	4.53	.457
4	D	3.59	3.73	.505	3.25	3.87	.004* 「有意」
5	E	4.64	4.34	.110	4.23	4.14	.685
6	F	4.67	4.56	.444	4.71	4.81	.297
7	G	4.26	4.56	.116	4.33	4.80	.001* 「有意」
8	H	4.64	4.48	.203	4.62	4.67	.676
9	I	3.90	3.93	.893	4.00	4.22	.251
10	J	4.78	4.39	.020* 「有意」	4.68	4.38	.039* 「有意」
11	K	4.46	4.64	.297	4.34	4.55	.252
12	L	4.73	4.63	.472	4.62	4.63	.983
13	M	4.76	4.78	.897	4.75	4.88	.171
14	N	4.44	4.56	.532	4.42	4.56	.454
合 計		4.47	4.46		4.40	4.55	

これに対して、右側に整理されている「理解度」の特徴については、まず合計値が示しているごとく、社会人の理解度（4.55）は、大学生の理解度（4.40）に対して、0.15も上回っており、総じて社会人の方が大学生に比べて理解度が高い傾向が伺える。さらに、各14回の個別の比較分析結果が示しているとおおり、理解度に関して有意差が判明されている組合せが4つも存在し、満足度とは異なる特徴を示している。

アンケート調査票の自由記入欄、および聞き取り調査の結果によれば、講義の満足度や理解度（従属変数）に影響を及ぼす独立変数として、講義の内容、難易度、講師の積極性や情熱、説明の丁寧さ、声のトーンや抑揚、資料の有無、資料の内容、視線や態度、身振りや手振り、顔の表情、その他があげられる。

社会人受講生は、特に講義の内容、新たな発見や気づき、講師及び受講者同士の意見・情報交換、資料の内容等が起因して、それらが満足度および理解度の決定に影響を及ぼしているが、総じて大学生の抱く満足度と理解度は、上述した独立変数のすべての組合せに起因していることが推察される。

本公開授業の満足度と理解度を向上させるための改善施策として、どこまで、どのように、前述した独立変数を考慮に入れるかは、本稿の解析の範囲とレベルを超えるものであり、継続課題として研究に取り組んでいくつもりであるが、いずれにせよ、授業に対する受講生の多様でこまやかなニーズの存在を、担当講師に情報提供していくことは、重要な管理項目になりうると考える。

第4章 今後のキャリア系公開授業で学んでみたいテーマについて

本章では、アンケートの自由記入欄の意見および聞き取り調査結果を参考に、今後のキャリア系公開授業で学んでみたい講義テーマについて、受講者の意見を紹介することにする。

【経営者の意見】

- ① コーチングについて学びたい
- ② TQMを理論と実践の両側面から学びたい
- ③ キャリア・コンサルティング、カウンセリング手法等の実践論
- ④ 人材育成の具体的な手法と事例紹介

【管理者の意見】

- ① 「トップマネジメントの経営実務講座」の継続を望む
- ② キャッシュフロー会計実践論
- ③ マネジメントとアカウンティングとの関係について

【若い社会人と主婦の意見】

- ① 環境と企業発展：負荷を低減させる方法論
- ② 共生する社会に向けて：エコ・地球環境と経済
- ③ CSR：経営者としてやってはいけないこと、これだけは譲れないこと
- ④ 英語での授業：経営者が自らの事業経営について英語で講義する
- ⑤ 沖縄の将来展望：経済、政治、経営、等の側面から
- ⑥ 統計的分析手法について：実習形式を希望します
- ⑦ 沖縄県の学力向上施策：教職員と学生の両面からの考察

【大学生の意見】

- ① 社会人受講生と本音でディスカッションできるような講座を望みます
- ② 若い経営者の経験談や職業観について話を聴いてみたい
- ③ 沖縄のシンクタンクの方々のご意見をお聴きしたい
- ④ 起業に至るプロセスに関する苦労話、また起業家としての持論についてお聴きしたい
- ⑤ 大手企業で活躍しているプロの方の話を聴きたい
- ⑥ 沖縄の大手企業の経営者もしくは管理者の実践論を聴きたい
- ⑦ 大学生が起業することについてのチャンスとリスク
- ⑧ 沖縄の流通業、石油関連産業に従事する方々の話を聴きたい
- ⑨ 感動を誘う経営について
- ⑩ 経営者の方々が、もし20歳に戻れたとしたら、自分は何に挑戦するかについて
- ⑪ 各企業の人材育成に関する具体的な手法について学びたい
- ⑫ 排出権取引について学びたい
- ⑬ 起業する際の心得について
- ⑭ 沖縄が自立することの必要性とその方法論について
- ⑮ CS（顧客満足）とES（従業員満足）とPS（地域社会の満足）との三位一体について
- ⑯ 「トップマネジメントの経営実務講座」の継続を望む

以上、約30名の受講者より、今後期待する講義テーマについての紹介をしたわけであるが、今後の課題としては、それぞれのニーズを尊重すると同時に、さらなる聞き取りニーズ調査を継続させ、地域住民の公開授業に対する本音と生の姿を掴むことが重要と考える。

さらに、既に言及したごとく、これからの沖縄経済社会が求める質の高い経営者および管理者の育成に相応しい課題を厳選し、理念論および実践論としての授業内容の充実を図ると同時に、双方の融

合を実現しうる授業内容の企画・開発が求められている。さらに、具体的テーマを受講生に提供し、授業内容並びに自身の学習を通じて、各テーマに対する答えを創り上げ、その成果を蓄積できるような講義内容の改善と工夫をしていくことが重要と考える。

おわりに

「知識基盤社会 (knowledge-based society)」の到来のもと、新しい知識、情報、技術が社会のあらゆる領域での活動基盤として求められるようになってきている。まさに、地域社会が大学の専門教育および生涯学習教育に寄せる真の期待を見だし、それに適う実践的かつ応用的な教育・研究を推進し、地域社会の再生と活性化に貢献できる人材を育成していくことが、これからの大学の使命であり責任でもある。特に社会人を対象としたリカレント教育（再教育）の必要性は、教員免許更新講習の実施に象徴されるごとく、これからの大学が取り組むべき社会的責任（USR）であると考えられる。

また、世界金融危機の到来のもと、各企業は直面する問題の解決と経営の健全化に向けた努力を推進すると同時に、高度な技能と資質を有する職業人の育成を大学に求めている。すなわち、沖縄、アジア太平洋地域の産業特性をもう一度見直し、それらの顕在的ニーズのみならず潜在的ニーズを掘り起こし、新しいサービスのあり方、新しい商品のあり方、新しいマネジメントのあり方、さらには新しい人材開発のあり方を創造し成果を生み出す人材の育成をしていかなければならない。地域に根ざし、地域と共に発展する本学の基本理念に準じた方向性の一助となるべく、キャリア系公開授業のさらなる改善と工夫に取り組むことの必要性を重要性を再度提起することにより、本稿の結びとする。

[注1] 文部科学省生涯教育課ホームページより

[注2] 大阪教育大学教職教育研究開発センター編『第30回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会資料』より引用。

平成17年から20年にわたる琉球大学生涯学習教育研究センターの公開授業に関する資料から引用